

金剛般若經の研究

林 岱 雲

一 總 說

由來金剛般若經と禪宗とは其の關係頗る深く、支那禪宗第六祖慧能大師が町に薪を鬻ぐに當つて、客の誦せる金剛經の一節を聽きて五祖弘忍に見えし事實は、叢林の雛僧も尙熟知する所なり。本經中の是法平等無有高下是名阿耨多羅三藐三菩提の文、並びに善男子善女人、受持讀誦此經、若爲人輕賤、是人先世罪業應墮惡道、以今世人輕賤故、先世罪業則爲消滅、當得阿耨多羅三藐三菩提の文、及び、過去心不可得、現在心不可得、未來心不可得の文等は併びに古來公案として實參實究され來りし處なるが故に、是に關聯して彼の本經に精通せるの故を以て周金剛王と自稱せし徳山宣鑿撞著の史實を始めとして、幾多の話柄生ぜし、又た所以なきに非ず。

二 金剛般若諸經の譯出

經錄を案ずるに、梁代僧祐の出三藏記集出三藏記集第二 大正藏第五十五卷、一一には姚秦鳩摩羅什三藏に金剛般若經一卷の譯出あることを記し、法經錄は留支譯を追記し次で費長房は其の撰歷代三寶記歷代三寶記第八 大正藏第四十九卷七八に羅什に金剛般若經一卷の譯出あることを二秦錄によつて認め、元魏菩提流支の譯出に關し

金剛般若波羅蜜經一卷 永平二年於胡國第譯是第二出僧伽筆受 と記して、本經譯出の年時、場所、筆受者名と、羅什譯との關係を明記し、法上錄に依る旨を指摘せり。

更に眞諦三藏譯 歷代三寶記第九卷、八七 に關して、

金剛般若波羅蜜經一卷 第三譯與秦世羅什魏世菩提流支出者同本文有廣略耳 と記載せり。彦琮錄、是を受け、靜泰錄、更に玄奘譯を追記し、內典錄は、略ぼ靜泰錄の説を踏襲せり。

更に下りて智昇は開元釋經錄 開元釋經錄第十一卷、五八三 に、

金剛般若波羅蜜經一卷、合衛國姚秦三藏鳩摩羅什譯 第一譯、

金剛般若波羅蜜經一卷、婆伽婆元魏天竺三藏菩提留支譯 第二譯、

金剛般若波羅蜜經一卷、祇樹林陳天竺三藏眞諦譯 第三譯、

能斷金剛般若波羅蜜多經一卷、室羅筏大唐三藏玄奘譯 出內典錄 第四譯、

能斷金剛般若波羅蜜多經一卷、名稱城大唐天后代三藏義淨譯 新編入錄第五譯

右五經同本異譯、其第四本能斷般若、貞觀二十二年沙門玄奘、從駕於玉華宮弘法臺譯、後至

顯慶五年、於玉華寺翻大般若即當第九能斷金剛分、全本編入更不重翻准諸經例合八大部

者即同別生、此錄之中不合重載爲與沙門義淨譯者名同、恐有差錯故復出之 三師造論同釋此經

と記して本經の譯出年時（慈恩大師は其の著賛述に貞觀二十三年なりと云へり。異本は二十年に作

る）譯場を示し、大般若六百卷四處十六會中の第二處第九會室羅筏城給孤獨園說能斷金剛分は、正に本經にして、後に玄奘三藏が般若經の一大叢書たる大般若經譯出に際して、特に第九會第五百七十七卷を再譯することなく、貞觀年中弘法臺に於て譯出せしものを編入せしことを語れり。

然るに現流縮冊藏經並に大正藏經等には羅什譯、菩提流支譯二經、眞諦譯、笈多譯、玄奘譯、義淨譯の七本を收載せり。中に於て流支譯中宋藏に收録されたるものと、麗・元・明三本藏經中に收められたるものは全く別物なり。宋藏本を検するに其の首尾を通じて全く陳代眞諦三藏譯と一致し殆ど異なることなし。是は宋藏本編纂者が眞正の流支譯を佚して、眞諦譯を重復收載し而も譯者名を安ずる爲に留支を以てするの過誤を犯せるに淵源せるものにして、元藏流支譯の後記に、

金剛般若前後六翻、按開元錄此第二譯、思溪經本竟失其傳、誤將陳朝眞諦三藏者重出、標作魏朝留支所譯、大有逕底、今於留支三藏所翻論中、錄出經本刊版流通、庶期披閱知有源矣、時至元辛冬孟望日南山普寧經局謹記

と有りて、思溪本即ち宋藏の失を指摘せること予が前に記せるが如し。然るに縮藏編纂者は漫然是を併せ收めたるに依つて今日あるを致せるものなり。而も元藏にては留支三藏の譯出にかゝる本經の釋論たる世親著、金剛般若波羅蜜經論三卷中より經の本文のみを録出して版に付し流行せしめしことを記せり、宋藏の過誤なること知るべし。

次に笈多譯に關しては、開元錄以前の諸經錄には一も是れに觸れず、麗本開元錄又た是に就いて何等記載する所なし。宋・元・明三藏本開元錄第十一卷、大正藏第五十五卷、五八三は、

金剛能斷般若波羅蜜多經一卷、隋大業年中三藏笈多譯 第四譯、(明本は笈を汲に作る誤なり)

と記して笈多譯を認めたり。試みに開元錄第七卷開元錄第七卷、大正藏第五十五卷、五五二 貞元新定釋教目錄第十貞元新定釋教目錄第十卷、大正藏第五十五卷、八五一を見る

に、

初笈多翻金剛斷割般若波羅蜜經一卷、及普樂經一十五卷、未及練覆植偽鄭淪廢不暇重修、と、即ち未定稿の儘存在せしが故に内典錄並びに古今譯經圖記等は本經を其の譯出聖典中に數へざりしなるべし。其の筆受者たる彦琮に達磨笈多傳四卷の著あり。もし現存せば此の間の消息明瞭なるべきも今日失せて存せず、知るに由なし。貞元錄、至元錄等は率ね開元錄の記事を踏襲し、此の經に關し何等異記を傳ふることなし。笈多三藏譯金剛般若論は宋・元本は二卷にして明本は三卷なり。前者は論中の經を引用するに當つて其の首部のみを掲げて餘他を等取せるに對し、明本は其の悉くを掲げ且つ科判を施せり。而して前者論中引用の本經は現存せる六譯中にては流支譯に最も近しと雖も一致するには非ず。後者は引用本經符節を合する如く流支譯に一致す。笈多が未定稿なる爲め自己の所譯經を用ひずして流支譯を暫らく依用せしか、或は後人の加筆ありや今是を判定し難し。

予曩きに支那唯識教學の初祖と仰がるゝ慈恩大師基法師の名著、唯識論樞要を披見し次の文を見たり。曰く、

能斷金剛般若經、依杜行顛梵本、貞觀二十三年、於玉華宮夜翻朝進云々

と。右杜行顛は開元錄開元錄第九
大正藏第五十五卷、五六九によらば、京兆の人にして儀鳳年中に朝散郎行鴻臚寺典客署令に任じ、諸の蕃語に通じ文藻あり、特に梵語に精通し、其の妙を窮はめたり。時に屬賓三藏佛陀波利、梵經一夾を齎し來り、闕に詣りて奉獻せしを以て、帝詔を以て日照三藏並びに杜行顛等をして譯出し奉進せしむ。是れ即ち佛頂尊勝陀羅尼經なり。日照三藏證義の任に當れり。

今日禪宗にて朝夕讀誦せる佛頂尊勝陀羅尼は本經中の陀羅尼の部分のみを抄出せるものにして、本經の約六分に該當す。梵夾將來者佛陀波利譯と、後ちに各々別に譯出せし杜行顛譯と、日照譯の三譯現存せり。

開元錄は大周錄等が、此の陀羅尼經を以て日照譯となすに就いて論議を重ね、佛陀波利譯序文の年代上の豫質を指摘せり。

右杜行顛の金剛經譯出の記事は次の理由に依りて輕視すべからず。即ち慈恩大師の寂年は永淳元年（西紀六一二）にして右譯出に後るゝ三年なるが故に顛とは同時の人なり。且つ又た其の譯場たりし玉華宮は慈恩大師の師玄奘三藏の譯場たりしが故に慈恩常に出入されし所なり。故に樞要の所述は

最も重んず可きものなり。然れども惜しむべし今は其の譯傳らず。故に古來金剛般若經は六譯六存なりと言ひ來りしも、右慈恩大師の説を肯ふ時は七譯六存一缺と言ふべし。

今日我が宗門にて讀誦せるは羅什譯にして、天台智者大師は金剛般若經疏金剛般若經疏 大正藏第三十三卷、七六に

羅什法師秦弘始三年(西紀四〇一)即ち晋安帝十一年譯と言ひ、明佺亦た大周錄に金剛般若經一卷、

右後秦弘始三年沙門羅什於長安逍遙園譯(明佺は仁王般若亦同年譯と云ふ)出長房錄と言へり。羅

什の長安に來りしは弘始三年十二月二十日なりしこと、大智度論序、大智度論第一 梁高僧傳等 大正藏第五十卷、三三二の記の如し。而して出三藏記集、歷代三寶記等は譯出年時を明記せざることを、前の如

し。什長安に入りて年内餘日無きを以て寧ろ嘉祥・慈恩等金剛般若經疏第一 大正藏第三十三卷、九〇 金剛般若經疏論纂要上

が、大正藏第三十三卷、一五五

羅什法師弘始四年(西紀四〇二)於逍遙園正翻一卷

と記されたるを穩當とすべし。他の諸譯の譯出年時に關しては今直接所要に非らざるが故に省略す

右六譯中古來最も廣く用ひられたりしは羅什譯にして、僧肇・天台・嘉祥・慈恩・宗密等の章疏悉く

秦譯に註し、唯だ金剛佛論が流支所出なるを以て經の本文亦同一なるは自然のことなりと云ふ可

く、至相大師智儼が魏譯を依用されしは特異の例なりとす。

三 金剛經の流傳

諸大乘經中、般若諸經の大部分が最も早く成立せるものなることは聖典發達史を論ずる者の多くが認むる處なり。本經の成立に關しては、他の諸大乘經典、殊に般若諸經の成立に關聯して論究すべき性質のものにして、今遽かに論定し難しと雖も、經中に、

如來滅後後五百歲、有持戒修福者於此章句能生信心、
と言ひ。又た、

若當來末世後五百歲、其有衆生得聞是經信解受持、
と言へる文は本經成立の年時を暗示するものなり。

支那に傳譯されたる本經釋論の印度にて撰述されたるもの左の如し。(開元錄に依る) 開元錄第十二
大正藏第五十五

卷、六〇七

- 一、金剛般若論二卷 無著菩薩造 隋天竺三藏達磨笈多譯
- 二、能斷金剛般若波羅蜜多經論頌一卷 無著菩薩造 大唐三藏義淨譯
- 三、金剛般若波羅蜜經論三卷 天親菩薩造 元魏天竺三藏菩提留支譯第一譯
- 四、能斷金剛般若波羅蜜多經論釋三卷 無著菩薩頌世親菩薩釋 大唐三藏義淨譯第二譯
- 五、金剛般若波羅蜜經破取著不壞假名論二卷 功德施菩薩造 大唐中天竺三藏地婆訶羅譯單本の五本を擧げたり。第三と第四とは同本異譯にして、第二は第四中の頌のみを別出せしものとす。

抑も無著は世親と共に印度中觀教學の大成者にして、若し此の二人の出世を見ざりせば、恐らく今日の如き組織ある教學を見ること能はざりしなるべし。古來無著は日光定中所現の彌勒菩薩より、瑜伽論、大乘莊嚴經論等の所謂五部の大論を親授されたりと傳ふ。然るに近時宇井伯壽博士は彌勒を以て史的實在の人物なりと論證し、五部の大論は其の著述にして、無著の著述と別に取り扱はんとせり。従つて金剛般若論に關しても八十頌は彌勒の述作にして、長行は世親の著なりと斷じ、無著の撰述は笈多譯の二卷(或は開いて三卷)なることを主張さる。

義淨の所傳は其の著書、略明般若末後一頌讚述に記さる。略明般若末後一頌讚述
大正藏第四十卷、七八三云く、

義淨因譯無著菩薩般若頌釋、訖……西域相承云、無著菩薩昔於觀史多天慈氏尊處、親受此八十頌、開般若要門、順瑜伽宗理、明唯識之義、遂令教流印度、

と記して、此の八十頌を彌勒より親しく受けたることを示せり。天台の説金剛般若經疏
大正藏第三十三卷、七六亦た是に同じ。菩提流支所傳の金剛仙論金剛仙論第十
大正藏第二十五卷、八七四は、

明論主自云、此金剛般若甚深法門義釋、非自智力、乃近從尊者、胡名阿僧佉、漢云無障礙、(無著)比丘邊聞、復遠從彌勒世尊邊聞、明仰推功有在、非是謬傳故、言從尊者聞也、及廣說者、明無障礙比丘乃是性地菩薩、多聞強記、能流通大乘、折伏外道故、彌勒世尊感此閻浮提人、作金剛般若經義釋並地持論、齎付無障礙比丘、令其流通、然彌勒世尊但作長行釋、論主

天親既從無障礙比丘邊學得、復尋此經論之意、更作偈論、廣興疑問以釋此經、凡有八十偈、及作長行論釋、復以此論、轉教金剛仙論師等、

と言ひて彌勒世尊は但だ長行釋のみを作り、天親は偈論八十頌並びに別に長行論釋を制せることを主張せり。即ち義淨の八十頌は彌勒の制作なりと主張せる所傳と異なること知るべし。然も彌勒を以て無著の定中所現とするときは、其の能現に約すれば功を彌勒に歸し、所現に約して言はゞ無著となるべく、古來所傳必ずしも矛盾する所に非ず。彌勒・無著・世親の中觀教學大成者、各々本經講鑽に功を盡されたること如上の如し。

又功德施は別に二卷の論を作り、唐代日照によつて譯出され現存す。西藏所傳には唯だ蓮戒 (malasia) 著なる聖金剛能斷般若廣釋一部存するのみ。

世親の金剛般若論を解釋し、從て本經を註疏せる書に金剛仙論十卷あり。由來此の論に關しては眞僞說喧しく、其の第五卷・第六卷・第九卷の卷首に、

魏太平二年菩提流支三藏、於洛陽譯

とあり、又第十卷末尾の本文に、

論主天親……復た此の論を以て金剛仙論師等に轉教し、此の金剛仙無盡意に轉教し、無盡意復た聖濟に轉教し、聖濟菩提流支に轉教す。迭ひに相ひ傳授して以て今に至る、始より二百年許、

未だ曾て斷絶せず。

と言ひ、一見本論の内容は世親より展轉傳持されたる學説を其の儘流支によつて譯出されたるもの如くなれども、慈恩(金剛般若經讀述上 大正藏第三十三卷、一二五)は、

金剛仙所造、即謂南地吳人、非眞聖教也、此或十一卷、或十三卷成也。

と云ひて南地吳人の作と斷じ、智昇も(開元釋教錄第十二 大正藏第五十五卷、六〇四)亦た、

又た金剛仙論十卷有り。文理を尋ね閱するに乃ち是れ元魏三藏菩提留支の所撰にして天親論を釋せり。既に梵本の翻傳に非ず、所以に此の中に載せず。

と記して此の論は世親の疏を釋せし流支の撰著なりと言へり。思ふに世親疏の精神右記の人々によつて相承さるゝ間漸次發展し流支の意亦た加上されて現形を成せしものか。

一度び羅什によつて本經が支那に傳譯さるゝや、其の俊足の弟子僧肇は直ちに金剛般若波羅蜜經註一卷を撰す。是れ支那に本經に疏有る初なり。現に續藏中に收めらる。次いで梁三大法師中の開善寺智藏は、至心を傾けて日々本經を受持讀誦し空中より世壽を倍增せしむべしとの告勅を受けたりと言はれ、莊嚴寺僧旻と共に疏の撰ありたるもの如く、嘉祥疏中に引用されたるを見る。隋代淨影寺慧遠亦た疏を製せしも今は傳はらず。天台智者大師疏一卷を著はし、名・體・宗・用・教の五重玄義に約して大師特自の立場に依つて本經を釋し、嘉祥大師、吉藏法師は疏四卷を撰して六朝諸家の

説を引用批判し、唐代に入り至相寺智儼は略疏二卷を撰し、慈恩大師、基法師贊述二卷を著し外に本經の玄記、會釋の二部を作り、宗密禪師は纂要兩卷を撰述して無著・世親の兩論、並びに青龍・火雲・資聖・塵外の疏の精要を取りて解釋せり。宋代に入りて特に禪林に有名なる道川に金剛經註三卷あり。世に川老金剛註と言ひ訓はし、今現に廣く用ひられつゝある所にして、頗並びに着語を付して禪門の立場より本經の文々句々に評語を下せり。宋代禪宗天下を風靡するにつれて本經の講讚頗る盛なりしもの、如く、楊圭の編せし集解は世に十七家註の稱あり。其の外子璿、張無盡亦た疏を製し、此の傾向は明代に及び續いて清代に至れり。明洪蓮の編せる註解四卷は五十三家註と稱せらるゝ如く、五十三家の説を引用し編纂せり。本經に註疏を施せし人、唐代既に八百餘家有りしと言はる。即ち前掲の名匠を一覽するに地論・天台・三論・唯識・華嚴等の教學を大成せし碩學、及び禪者を悉く網羅せしを見るべし。従つて本經の支那人心に及ぼせる頗る大なりしもの、如く、次に掲ぐる靈驗記の内容は一般民衆に映ぜし本經の一面を語るものとして本經流通の一斑を示すものと云ふべし。即ち

金剛般若集驗記三卷、唐、孟獻忠撰

金剛經鳩異一卷、唐、柯古撰

金剛經受持感應錄二卷、宋、失名

金剛經感應傳一卷、失名

金剛經新異錄一卷、明、王起隆

金剛經持驗記二卷、清、周克復

金剛經感應分類輯要一卷、清、三澤注

等多數を算し別に我が國淨慧に靈驗傳三卷の撰あり共に續藏經中に納めらる。茲に支那禪宗第六祖慧能大師の著と言はる、金剛經解義二卷あり、或は金剛經註解と稱し、又た金剛經口訣とも云ふ、六祖解義、六祖口訣等の別稱ありて、川老註及び明宗游の註解と共に會本として流行し居れども解義の内容は教臭多く、六祖の眞撰とは言ひ難し。其の外に六祖に別に金剛經直解の著ありと傳へられ現存せるも、是れ亦眞撰となすに些か躊躇さるゝものなり。

四 金剛經の内容並に組織

嘉祥大師に依れば、大悲比丘尼本願經末記

金剛般若經疏第一
大正藏第三十三卷、
同

九〇に云く、金剛般若は本八卷有りし

も、今は零落して唯だ格量功德の一品のみ殘存し一卷と爲りしが其の本の名を存して金剛般若經と名づく。嘉祥是を肯はず批して曰く、第一、此の一卷の經は三譯ある内、羅什若し八卷有りとせば何ぞ單に一卷のみを出して八卷とせざりし。第二、流支三藏此の漢土に重ねて翻譯するや經と論と合して三卷と爲せり、論旨始終完く事義缺くる所無し。初は經の緣起歸敬の義を明し、終に隨喜

讚歎功德を表せり。若し八卷有らば何が故ぞ一品を解するに止めんや。第三に眞諦三藏嶺南に於て此の經を重翻するに八卷有りと言はず、且つ又た現在一卷にて序正流通の三分具足せり、何ぞ止だ八卷中の一品のみと言はんや、と論じて大悲比丘尼本願經末記の説を否定せり。

現存六譯、大體其の文相相ひ類似し、内容一致すれども、多少の異なきに非ず。秦譯の非說所說分第二十一、爾時慧命須菩提より、是名衆生に至る六十二字は慈恩を始めとして元賢等も指摘せる如く元來無かりき。隨て僧肇・天台・嘉祥を初めとして六祖口訣等は此の一節を缺き勿論疏有ることなし。然るに慈恩大師は贊述下卷金剛般若經贊述卷下
大正藏第三十三卷、一四九に流支譯より竄入補足せる具備の經を用ひ、此の文に關し、

述して曰く舍衛は此文を漏らせり、世親此れ第三疑中の第三文なり。

と言へり。茲に所謂る舍衛とは羅什譯を他の譯に甄別せんが爲めに法經錄以來用ひ來りし所にし、菩提流支譯金剛經を婆伽婆と言ひ眞諦譯を祇樹林と稱して、卷頭の特徴ある譯語を以て其の經を指示する便に供せるものなり。即ち、慈恩大師當時既に此の缺文を補ひたる事右の事實に依て明瞭なる所なり。然るに世一般右の事實に關して從來誤まれる解釋を下し、次の事實を信じ居れり。

即ち金剛經註解金剛經註解第四
續藏第三十八卷、四七一右に、

靈幽法師此の慧命須菩提の六十二字を加ふ。是れ唐長慶二年（西紀八二二）なり。今濠州鐘離寺石

碑上の記に在り、六祖の解は前に在るが故に解無し。今は亦た之を存す。

と言へるも、右長慶二年は慈恩の没年なる、唐永淳元年(西紀六八二年)を後るゝこと實に百四十年なり。若し右の鐘離寺の石碑の記の存せしこと事實とせば、古來の章疏を検せずして何人が右の話を妄作し、其に基いて建碑せしものと言はざる可らず。即ち嘉祥以後慈恩大師前後に早くも補はれたりと言はざる可らず。然れども宗密の疏に今の六十二字無く、燉煌出土の古經亦た此の文無し、故に補入本と、原譯本と同時にに行はれ居りしことを認めざるべからず。

又た法身非相分第二十六の五言四句一頌の、

若以色見我 以音聲求我 是人行邪道 不能見如來

の偈は魏譯以下皆

若以色見我 以音聲求我 是人行邪道 不能見如來

彼如來妙體 即法身諸佛 法體不可見 彼識不能知

の五言四句二頌より成り、一切衆生身中の自性清淨無爲無相眞常の法身、即ち偈に所謂る我、即ち佛身は色を以て見る可からず、音聲を以て見る可からず、正念分明にして始めて見ることを得べく、色聲に滯着せば如來を悟らず、佛は法身を以て體となすことを示せる主要なる偈なり。

有部毘奈耶雜事第四有部毘奈耶雜事第四 大正藏第二十四卷に次の説話あり。曰く舍利弗の弟子に善和苾芻ありて音聲頗

る美妙にして經法を諷誦するや雅韻にして群を超ゆ、然れども其の容儀極めて醜陋なりき。勝光大王、始め其の音聲を聞きて敬信せしも、一度其の容貌の醜なるを見るに及んで輕侮の心を生じ、衣を擲て去れり。時に善和比丘、大王の是の如くなるを見て即ち偈を説いて曰く、

若以色見我　以音聲求我　愛染亂彼心　不能當見我

云々と、即ち善和比丘所説の偈の色空我空の精神は般若諸經をも貫く精神にして、金剛般若の偈と趣を全く同うし、大乘經編纂者によつて善和の偈の中心思想が原形を保持せる儘、完全に取り入れられ居るを見るべし。

又た秦譯正宗分最後の、

一切有爲法　如夢幻泡影　如露亦如電　應作如是觀

の偈は六諭の全文の稱あり。魏譯以下は、

一切有爲法　如星翳燈幻　露泡夢電雲　應作如是觀

とありて九諭を擧ぐ、金剛般若論頌に、

九種有爲法　妙智正觀故

とあり、無著、世親の釋亦た九諭を擧ぐる事實に徴し、羅什譯原本と、無著等の所覽本と相違ありしなるべし。

本經の章段に關しては無著は、一種性不斷乃至七立名に至る七種義句を以て、本經成立の目的内容を盡すべきことを示し、殊に七種義句中第三行所住處を十八住或は八住處に開いて、本經の文相に當て、科判に代へたり。僧肇は本經を三章に分ち、第一章は境空を明し、第二章は慧空を明し、第三章は菩薩空を明すと言ひ、菩提流支は具さに經を開いて十二分となせり。即ち一序分、二護念付屬分、三住分、四修行分、五法身非有分、六信者分、七格量分、八顯性分、九利益分、十斷疑分、十一不住道分、十二流通分なり。而して第二分より第九分に至るまでを利根に説ける一周説法となし、爾後第十一分までを中下根に對する第二周説法と爲す。而も具さに論ずれば護念付屬分より修行分に至る間は因を明し、法身非有爲分は果益を辯ずるが故に是れ一周に因果を明し、次に信者分より格量分に至るまでを因となし、顯性分を果となし、第二に因果を明すが故に第二周説法となす。顯性分に於いて佛性を明し、佛性に依る修行を因となし、因あるが故に得果す。即ち利益分は果を明す。此の因果一雙を第三周説法となす。斷疑を因となし不住道を果と爲す、是れ第四周なり。此の科判は流支に影響を受けたる、北地に盛んに行はれたりと云ふ。

嘉祥は右の十二分科の過失を指摘して、序正流通の三分は一經の大科なるに、正宗分のみを十分して同格に序分流分を扱へるは穩當ならず。又經文中、施福を格量せる一具の分の半を格量分とし、半を顯性分として中斷し分科せるは過失の甚だしきものなりと論じて其の科判の取る可らざる

ことを指摘せり。

有師は本經を、一序分、二護念分、三住分、四修行分、五斷疑分、六流通分と分科し、又一因緣門、二般若體門、三功德門の三分科を立てたり。共に其の缺點を示して破斥せること金剛般若疏中

金剛般若疏第一
大正藏第三十三卷、九〇の如し。

現時流布本の秦譯には、法會因由分第一以下應作非眞分第三十二に至る三十二分科を施し、古來梁武帝の王子昭明太子の所立とせり。然れども隋唐以來の本經に關係ある註疏に一も是に關し述べ或は採用せるものなく、嘉祥大師の如く古來の文段に關し諸家の異説を擧げたる中に此の事を記さず、宋代張無盡居士、三十二分科に註釋を附したる事實あるが故に或は同時代の作に非ずやと思惟さる。

天台大師は、序正流三分説を用ひ、始めより已敷座而坐に至る間を序分、時長老須菩提より應作如是觀に至る間を正宗分となし、爾餘を流通分となす。正宗分中を二分し、果報亦不可思議に至るまでを第一周説法となし、他を二周説法と判ぜり。

圭峰は一經全體金剛般若經疏論纂要上
大正藏第三十三卷、一五四を判じて十八處に階差を密示し二十七疑を斷じて潜かに血脈通ずと言ひて無著の論の十八住處説并に世親論の意を迎へて本經は、二十七疑を斷ぜんが爲めに説かれたるものにして、第一斷求佛行施住相疑より、第二十七斷入寂如何説法疑に至る二十七段に分

判し全經中、逐次二十七疑を斷じ終始脈絡貫通せる旨を論ぜり。

世に本經を批評して第一周說法と第二周說法とは内容重複せる點多きを以て、印度に金剛經の種々なる異本行はれ、一本の前半と他の後半が偶々結合されて今日の本經成立せりと論ずる士あれども、仔細に見來れば、表面一應相似たれども内容は漸を追ふて相違し、慈恩大師が贊述中に第一周說法は生善の爲め、第二周說法は斷疑の爲め、第一周は利根を對機とし、第二周は鈍根を對機として説けりと判ぜらる。又前に示せる圭峯宗密の説の如き妥當なるを覺ゆる者なり。敢へて右の如き倚論に左祖せんと欲せず、第一周第二周相補ふて始めて一具の完全なる聖典たりと言はざる可らず。

五 金剛經の中心思想

本經の中心、即ち金剛經は何を以て宗となすかに關し、嘉祥大師は六朝諸家の説を掲げ批判を下せり。金剛般若經疏第一
大正藏第三十三卷、八七 曰く、
有人言く、無相の境を以て宗と爲す、此の經は正しく萬相を遣蕩して無相の理を明すが故に、無相の理を以て此の經の宗と爲す。

有人言く、此の經は智慧を以て宗と爲す、是に二説あり、一の説に云く、慧に二種有り、一には因中の智慧、二には果中の智慧、今は正しく因中の智慧を以て此の經の宗と爲す。有人言く、初地よ

り以上佛果に至るまで皆平等に悉く經體たり。即ち因と果と並びに皆經の宗と爲す。

有人言く、但だ無相の實慧を以て經宗と爲す。

有人言く、實智と方便智と悉く經の宗と爲す故に大品の二周説は具さに此の二慧を明せり。

有人言く、境と智と合して經の宗と爲す。故に瑤師云く經の宗極を語らば則ち實相を以て宗と爲し、聖心を明さば則ち妙智を以て宗と爲す。故に境と智と合して、本經の宗と爲す。嘉祥は右諸説に對して一々批判を下し缺點を擧げ自義を立てたり。即ち、

無依無得、一の所住無き、即ち是れ般若の眞宗なり。

般若は因に非ず果に非らず正に因果を以て宗と爲す、因果を此の經の正宗となすのみ、

と言へり。天台大師は五重眞義金剛般若經疏
大正藏第三十三卷、七五に約して曰く、

體者若見諸相非相即見如來是經之正體也。宗者約實相之慧行無相之檀、如人有目日光明照見種々色是因、諸相非相是果、此之因果同約實相。

用者破執爲用、一切封著名爲執、破諸相惑顯出功能亦自無滯即力用也。

と言ひ、至相大師智儼は、

總じて宗趣を明さば此の經は一實相般若、二觀照般若、三文字般若を用つて宗趣と爲し、別して

明さば五義あり。金剛般若波羅蜜經略疏上
大正藏第三十三卷、二三九

と言へり。

即ち本經は他の諸般若經と同じく人法二空の理を一經の根幹の思想と爲し、二空の理を明らむれば無爲法身を有爲の法の上に獲得し、茲に始めて我法に提はれざる無住の心を持つて如何なる布施——六度萬行——にも勝ざる眞の第一義諦の布施を爲すことを得べく、此の眞の布施、即ち法身獲得の上の般若經一四句偈の説法乃至書寫讀誦と他の布施の功德とを反復比較格量し法身六度行に對する諸種の疑を斷ずるを特色となす、小品般若、小品般若の如く寛に失せず、又心經の如く狭に終らず、寛狭善しきを得、而も般若中心思想の精要を盡せる本經が上來述べ來りし如く般若諸經中にも最も廣く流布し讀誦講讚されたるは誠に所以なきに非ずと言ふべし。

上來節を重ねて述べ來りし所を最後に要約すれば次の數項となるべし。

- 一、金剛經漢譯の變遷を見、現藏中に重複あることを指摘し。
- 一、古來の諸經錄が本經を六譯六存なりとせるを慈恩の説を採りて七譯を認め六存一缺と斷ず。
- 一、羅什譯の缺文補入は今日迄信ぜられ居りし長慶年中説は誤にして唐初期に遡るべきこと。
- 一、本經の流傳影響の範圍を研究し、本經に對する諸家の見解を概觀せり。